# 主体的に学び合う児童の育成

# ~話す意欲を高める対話活動を通して~

(3年計画の2年次)

校長 小笠原 一彦

## 1 研究主題について

本校では、教育目標に「豊かな心をもち、たくましく生きる子」、努力目標に「すすんで学習する子(知)」を掲げ、主体的に学習に取り組む児童の育成を目指している。また、学校目標を「かしこく、なかよく、たくましく」とし、学ぶ楽しさや喜びを感じることを通して、基礎学力の定着と主体的に学ぶ力や表現力を身に付けさせることを目標としている。

昨年度から国語科の研究に取り組み、授業実践を通して、課題の設定や提示の仕方、話す意欲を喚起する対話活動を工夫することで、児童が「解決したい」という意欲をもって学習に取り組む授業づくりを進めることができた。一方で、自分の考えを伝えるための話し方は身に付いてきたものの、話し合うまでに至っていない、問題解決に対して児童の必要感・切実感を持続させるのが難しいという課題が残った。

また、令和4年度のCRT学力検査の国語科における大領域「話す・聞く」に関する問題の得点率を見ると、「書くこと」「読むこと」の領域よりも低い学年が多く、「自分の考えを分かりやすく、伝わるように話す」力や「相手が伝えたい内容を的確にとらえて聞く」力が十分に身に付いていないことが分かった。このことについては、教科指導に限らず、日常生活においても本校の大きな課題となっている。

そこで、今年度は、対話を通して考えを広げ、自らの考えを再構築する対話活動に力を入れることで、問題解決への必要感を持続させたいと考え、本主題・副題を設定した。まず、毎週1回朝の活動で「話すこと・聞くこと」のトレーニングを継続し、話す力を身に付けるための基礎づくりを図りたい。また、授業においては、導入での発問や教材提示等、教師のはたらきかけを工夫して、問いの意識をもたせる。児童全員の考えや立場の相違を可視化し、思考に沿った課題設定を行うことにより、対話する意欲と必然性を生み出したい。更に、対話活動を通して考えを広げた上で各自が立場を再表明することで、自己の思考の変容を自覚させ、振り返らせたい。このように、児童が自分の考えの変容を自覚できるような対話活動を行うことによって、主体的に学ぶ児童を育成できると考える。

### 2 研究のねらい

児童が興味・関心、見通しをもって主体的に学び、対話的な活動を通して考えを広げたり深めたりするための授業づくりの在り方について、国語科の授業実践を通して明らかにする。

## 3 研究仮説

学習課題の設定の仕方や話す意欲を喚起し考えを広げる対話活動を工夫することで、主体的・対話的に学び合う児童を育成することができる。

#### 4 研究内容

- (1)問題解決的な授業づくりの工夫
  - ア 導入でのはたらきかけの工夫(発問や活動指示、教材や問題の提示、教材へのしかけ等)
  - イ 立場の表明(立場の相違の可視化・顕在化)
  - ウ 立場の再表明(立場の振り返り、思考の変容の可視化)
- (2)話す意欲を高めるための対話活動の在り方の工夫
  - ア 問いの共有(追究したい、解決したいと思わせる学習課題の設定)
  - イ 学習場面に応じた対話活動の内容や形態の工夫

## 5 研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・授業の概要
7	1 2	第1回授業研究(2学年) 授業者:教諭 渡邊 尚美 単元名 しつもんをしあって、くわしく考えよう 「あったらいいな、こんなもの」 (授業の概要) 導入で前時のペアでの話合いを振り返り、教師によるデモンストレーションを行ったことで、質問をすることの必要感をもたせることができた。対話活動では、話型を示したことでスムーズに話すことができた。また、ペアを意図的に替えることで質問や助言の視点が変わり、考えを広げることにつながった。
9	1 3	第2回授業研究(特別支援学級) 授業者:【あおぞら学級】教諭 後村武雄、【わかくさ学級】講師 上田公子単元名 【あおぞら学級】へんとつくり(3学年)敬語(5学年) 【わかくさ学級】いちばん大事なものは(6学年) (授業の概要) 【あおぞら学級】学年の異なる二人に活動の流れや時間配分を示して見通しをもたせ、つまずきを予想した手立てを講じることで迷わずに活動ができた。 【わかくさ学級】話型や役割を視覚化して司会を交代しながら対話活動を繰り返すことで、付箋を付け足しながら考えを広げていくことができた。
1 1	15	第3回授業研究(要請訪問・4学年) 授業者:教諭 大高 麻莉乃 単元名 気持ちの変化を読み、考えたことを話し合おう 「ごんぎつね」 (授業の概要) ごんに対する兵十の気持ちを考えて自分の立場を再表明する際、スケールを 用いてネームプレートを動かし可視化したことが、考えの変容をとらえるのに 効果的であった。また、同じ立場の人、違う立場の人と、相手を替えて複数回 対話活動を行ったことで、自らの考えを広げたり深めたりすることができた。

# (2) 一般研修

月	日	内容・講師
5	3 1	JS組織会
6	2 8	AED講習会
8	2 2	出前講座 国語科における授業づくりについての研修 講師 中村美穂先生
8	3 0	県学習状況調査 採点·分析
1 0	2 5	体育科の指導に関する研修 講師 小笠原一彦校長
2	1 4	生活科・総合的な学習の年間指導計画についての研修
2	2 1	<b>県外研修等報告会</b>

#### 6 研究の成果

- (1) 赤白帽子や付箋、登場人物の気持ちを表すスケール、ネームプレート等を活用することで、 自他の立場を顕在化させた。また、それらのツールの色や数を変えたり、動かしたりするこ とによって、立場を振り返り、思考の変容を可視化することができた。
- (2) 週に一度話す・聞くスキルの基礎をつくる取組を行ったことで話す意欲の向上が見られた。 対話活動における観点を明確にし、人数や相手、回数など、形態を意図的に工夫することに よって、話す意欲が高まり、考えを広げることのできる児童が増えた。

# 7 研究の課題

(1)話す・聞くスキルを向上させる取組を継続し、苦手意識のある児童にも、言葉で交流する楽しさを味わわせたい。対話活動において、教師と児童の双方が目的と観点を明確にもつことで、話し合う必然性と意欲を高め、主体的に学び合う児童の育成へとつなげていきたい。 (記入者 上柿 拓子)